

水た

二 準備

極兵団要員は大部分關東地方出身者であるので、東部復員連絡局同管内世話課の協力を得て、病院特に野戦病院関係者（發着受付係等患者の状況を承知してゐる者）及究明対象と同時期同病院に入院后飯還した者一三〇名に対し、關係資料を送付して照会を実施した後、資料保有程度を吟味し、奥上好資料を保有すると判定した近郊在住者四〇名に対し、招致状を發した。以上の外係官に於て、兵団部隊の行動、收容病院の位置、及状況、兵站線の状況等を、部隊資料、其他聽取資料に基き、充分研究し、究明対象たる入院不明者に就いては、縣別部隊別表、最新の資料を投入した入院患者名簿、患者分布図を究明資料として整備した。

三 實施

期 日 昭和二十五年一月二十三日（月） 九時—十七時
場 所 東部復員連絡局會議室

参集者

留部

第三課長 課員

東復

土井事務官

世話課

東京 埼玉 神奈川 千葉 山梨

主任者

招致者

十二名

順

序

第三課長挨拶

部隊及野戦病院行動概要、患者分布状況並

特殊資料の説明

3. 患者群毎の突明

(1) 揚子江以北(主として京漢作戦の患者)

(2) 湘桂地区の患者

(3) 其の他

4. 懇談

5. 結論

1. 行動概要 (別紙行動要図参照)

師団長 陸軍中将 落合甚九郎

作戦

京漢作戦

湘桂第一期作戦

東部衡陽道掃蕩作戦

安仁正面掃蕩作戦

遂贛地区攻畧作戦

三南作戦

江西作戦

野戦病院の状況

20.20	20.20	20.20	19.19	19.19	19.19	19.19	19.19
8.7	7.5	2.1	12.11	10.8	8.8	5.5	3.3
176	54	28	1016	1931	98	1211	15

第一野戦病院

長

軍医少佐

紺屋信一

第二野戦病院

長

軍医少佐

青柳良雄

編成人員 将校一三 准下五八 兵一七三

計 三四三

第四野戦病院

長

軍医少佐

林二郎

編成人員 将校二一 准下三八 兵三三

計 二八二

期別	院	病
1919 5.3 11.15	京漢作戰 河南省 河南省 河南省 河南省	第一野戰病院
1919 8.5 8.13	湘桂作戰 平江縣 醴陵縣 江西省 萍鄉縣	第二野戰病院
1919 1.8 16.2	東部戰場 安仁 湖南省 湖南省	第四野戰病院
1919 1.8 1.15	湖南省 湖南省 湖南省 湖南省	第一野戰病院
1919 12.11 12.10 10.10 9.1 9.9 10.1	湖南省 湖南省 湖南省 湖南省 湖南省 湖南省	第二野戰病院
1919 1.8 1.15	湖南省 湖南省 湖南省 湖南省	第四野戰病院
1919 1.8 1.15	湖南省 湖南省 湖南省 湖南省	第一野戰病院
1919 1.8 1.15	湖南省 湖南省 湖南省 湖南省	第二野戰病院
1919 1.8 1.15	湖南省 湖南省 湖南省 湖南省	第四野戰病院

第一野戦病院のみでも収容二千名に及び五〇%の死亡者を出して居る状況である。米陽第二野戦病院の状況も概ね是と同じである。遂に戦中の患者は贛県、集結河川を利用広東方面へ後送された。

突明対象人員部隊別縣別一覽表

合計	二野病	二七衛生	通信隊	輜重三七	工兵三七	山砲三七	〃三	〃二	支駐歩一	部隊/府縣
40		1	1	2	6	4	5	12	9	東京
10	1			2	2	1	2	1	1	神奈川
16					1	1	8		6	千葉
25				1	1	2	3	10	8	埼玉
6							5	1		山梨
9				1	1	2	2	2	1	其他
106	1	1	1	6	11	10	25	26	25	合計

患者群毎の究明

揚子江以北の患者群 (五一名)

満州後送 二〇 シベリヤ地区 2

北京天津地区 一五 新郷地区 6

京漢作戦地区 八

是等は兵団が昭19了分満州錦州を出發 河南省新郷周辺地区
集結間及194中旬京漢作戦行動開始後 信陽附近到着迄の間
に発生したもので 鄭城—鄭州—新郷—石門—北京等北都京
漢沿線上の兵站病院へ後送収容されたものである

患者の態様は若干の戦傷者を除き、大部分内科系で治療に長
期を要するものは満州(錦州興城奉天)病院へ後送、其の他は現
地病院で治療退院後は部隊追及してゐる

満州後送患者中四名の飯邊一名の死亡が判明した

天津一五三兵站病院収容患者三名中、中山保善は月日不明、後員
31秋山保は2/10奉天五龍背に於て満州中央軍に投じたとの資料を
得た北京第二陸軍病院十三名は1942及6.3夫、治療退院其の後

の行動不明であるが京漢線を南下し華中方面へ進出したものと判断される。11 小川兼吉は1952 北京第三陸軍病院治療退院部隊追及途次1957 岳州一三七兵站病院へ再入院し1958 後方へ転送1958 蘇州陸軍病院へ入院した事実が判明した。

1956 鄭州第一六九兵站病院を治療退院した11 二見武重に就いては將校以下二八名と共に部隊追及途次漢口以南の地区に於て生死不明となったとの情報(当守宅)を得たが其の出所及確度に就いて調査したが判明しない。

1959 信陽病院入院の11 高橋候隆は終戦後現地華中に於て疎隊したと推断される。(11 渡辺 準提供)

長台間附近で豪雨を冒し強行軍實施中患者続發したが其の大部分は信陽方面へ前送処理未済のものに無き苦である(11 小島市郎) 其の他新資料を得られない患者若干あるが当時の状況よりして尚州へ後送又は治療退院後部隊追及したものと判断されるが別途究明を要する。

2 南京上海地区 (七名)

大部分湘桂作戦に於ける後送患者である

南京才一陸軍病院入院の21小野八郎は賞書によりソ連千夕二分所に於て生存 上海才一陸軍病院入院のBA大澤満は月日不明内地飯還事實が判明した

3 湘桂作戦に於ける患者群 (二九名)

(一) 平江地区 (四名) (宛發着係小日向市郎提供)

(1966.11.22) 平江書院(中學校)に宛開設

野戦予備病院才五班より患者を引継ぎ主として通過部隊の患者を

收容 患者五〇〇 (内科三〇〇) (外科二〇〇) 外科患者は其の大部分迫害強行軍の

為発生した靴傷患者である

患者は平江―新市道(行程約三十二軒)を途中長樂街に泊新市野戦

予備病院第十五班へ後送された 附近は敵情悪く道路側高地から襲

撃を受け受傷者を出した事例がある

新市野予病才十五班資料によれば七月七日該病院の大爆撃最中汨水を

降つて平江方面より約一五〇名舟艇により夜間到着其の受授に混乱

を呈した事がある。

平江野戦病院に於ける死亡者は全部処理済の筈 21高柳正秋に就いては20/30江蘇省無錫に於てマラリヤに罹病と証言してゐるが確度疑はしい(東京都北多摩郡久米村大字前沢小金井平六)
BA岸内一雄に就いては新資料を得られなかったが死亡の公算大

(東京都大森区南千束町三六)

佐藤圓太郎)

(三) 新市地区 (四名)

野戦豫備病院第十五班(オ一八一兵站病院)は平江長沙方面からの後送患者及通過部隊落伍者と収容してゐる 七月六日夕より七日にかけて大空爆を受け大なる損害を出した外 西北方村落に移轉後患者の掌握不完全に基く事故及院患者の部隊追及中の事故が多かつた

又前線からの後送患者の半数が到着してゐない状況であるが後送途次の事故が相当あったものと予想される

11日榮春市は野戦豫備病院第十四班から第十五班へ転送された

のであるが状況は全く不明である

21 辻岡傳三郎は19720第十五班治療退院 19721原隊追及7.30

長沙着 8.9 衡陽へ向中前道 8.16 湘潭着 8.18 目所にて腹痛の

為 殘留 10.12-10.16 間 (正確な記憶なし) 野口文代の勤務してゐた衡

山連絡所に来り十月末部隊追及者約三十名 (連絡所四号宿舎宿泊者)

と共に衡陽方面へ出發した事、生死不明となる (野口文代提供)

(好資料保持者 衡山連絡所長 和田淳 東京都下谷区御徒町三三七)

東京都民生部世話課が和田淳に就き、調査した結果は左記の通りであ

衡山連絡所の状況

支駐歩一 陸軍大尉和田淳は1977月師団錬成隊長として綏陽に位置

し師団の殘留兵の訓練に任する事約一月の後 1911月衡山連絡所長

として衡山に於て部隊との連絡任務に服し1912月中旬衡山連絡所を

閉鎖し衡陽に推進連絡所を開設した

当時師団主力は醴陵より茶陵方面へ進出前道し其の落伍者病弱

者群は部隊主力に追従する予定の処状況の變化に伴ひ別路長

沙から衡山方面へ迂回し衡山に集結して部隊主力と連絡し追及者
を本隊へ追及させた（衡山附近湘江を渡河し攸県茶陵方面へ直行）
27D 関係者に限らず軍需品の輸送連絡各部隊各所の兵員に対しても
無電連絡により本隊へ追及させたが書類を焼失したので確たる記
憶がない 大体七十名のを取扱ったが当時の状況は相当困窮し
て居り追及の片船舶又は自動車便によるものもあり敵隊を厭
む者もあり途次敵襲による戦死者生不問者も相当数に昇
つたと聞いてゐる

昭1978 新市退隊者は衡山に向り船舶によつた模様である当時
事故は頻發して居り衡山へ未到着のものは途中敵襲による生死
不明者と判断される

以上

11 吉田金壽は平江組より新市野戦予備病院才十四班へ転送されたが19
79 治癒退院（同時退隊者五名位）戦友一名（氏名不詳）と糧秣徴發
に出た終生死不明となる 敵意を有する土民の爲殺害されたもの
と判断される

（森山 勲提供）

1941 河南省新御兵站病院入院の桜井政吉は其の後調査の結果
1929 新帝野子病才高班を退院した事か判明した(患者名簿)
川陸川守正、向後二郎に就いては新資料を得られなかつたが前記
辻岡侍三郎、吉田金壽と同運命を辿つたものと思料される
孔島洋金雄は1965 糸州才三七兵站病院、1968 治療退院部隊追及
途中生死不明となつたものである

(三) 瀏陽地区 (九名)

2FL (11/17) 野戦豫備病院第十四班(後の才一八三兵站病院)開設
患者は輸送隊により長沙方面へ馬送された

退院患者は部隊追及の爲長沙へ出て衡陽道を南下してゐる

途中の敵情最も悪く極兵団の七十八名(氏名不詳)が瀏陽に於て
民船を徴發、瀏陽河を下航長沙に向ふ途次敵襲に遭ひ相
当大なる損害を受けた例がある。同船者石井清(静岡県熱海市
海三五)は下帯一本で長沙へ到着したとの情報がある

川澤健治(神奈川県足柄下郡前村村根尾三五六)高野内朔也(千葉県印
郡安食町安食三五七)は右状況に就いて資料保持者である

1973 浏陽退院の 27 新井麻久、28 宮内茂雄、29 中山三四郎、30 福島雄次郎、31 石井志郎、同新倉繁一は右同船者と史料よれるが右の様な敵情下、少数人員による部隊追及は極度の危険にさらされて居た事は事実である。

但 27 石井志郎は 1971 衡山に於て空爆により戦死との資料も得てゐるので其の確度について調査中である。(千葉県君津郡昭和所粕屋石見)

(四) 長沙地区 (二名)
長沙第一八四兵站病院入院の 27 須長義輔、28 波澤大太郎に就いては新資料を得られなかつた。

(五) 醴陵地区 (三名)
471 (1977/41) 開設

収容患者約二千名に達し、病状業務の最も繁忙の時期である。内科患者の大部分は栄養失調症で一日平均二〇名の死亡を生じてゐる。本期間然し激烈を極め、戦員不足の爲、軽患者で出戦可能者は銃を執りて前線へ歩動を余儀なくされた。

周辺の敵情亦悪化し、19810醴陵は敵五十二軍の重圍に陥るが、817出撃是を退した。

患者は輸送隊により株州方面へ後送されたが、株州は二週間の日時を要する状況であった。19914岩本支隊(岩本少将の指揮する第五野戦補充隊後の第百五師團)の患者を申送り攸果、前進した。

石関長治、北條貞治に就いては新資料を得られなかった。資料提供者加藤博久は、死入院中、大竹松治に面接してゐる。

(六)株州地区(大名)

(1977.7.24)野戦豫備病院第十五班患者療養所

(1977.11.25)野戦豫備病院第三班患者療養所

(2011.7.29)第一三七兵站病院患者療養所

患者は夜塘鋪をきて湘潭易俗河方面へ後送された。

石染谷武夫、石秋山茂雄、石山崎猛は1998株州病院退院後

原隊追及の爲衡山方面へ向つたものと判断される。

途中敵情悪く湘江を船舶輸送したものは其の三分二位は衡山へ到着してゐない。

例大若正司は20/11 遺腹後妻結南舎に待機中戦友三名と糧秣敵
發下趣いた終生死不明となった事が判明した戦友の氏名不詳であ
るが資料提供者桜井猛の言によれば、東京都の住民一蘭及三
関某である。調査の結果三六中隊神奈川縣 軍曹関邦夫と判明

したので同一状況下戦死認定するを可とする。 関邦夫は19/12 株

州兵站病院 遺腹原隊 追及中兵站南舎に待機してゐたが20/2 戦友
三名と糧秣敵發下赴いた終生死不明となったもので戦死認定済である
277 吉田順は武漢第一陸軍病院追後送 された筈

(千葉縣館山市上湊賀三〇 吉田友次提供)

(七) 茶陵 攸県 安仁 蓮花 衡山地区 (十八名)

(八) 茶陵地区 (六名) 1/F1 (20/9/15)

本期間兵団は東部衡陽道掃蕩作戦 安仁正面作戦を実施したが駐留
警備が主任務で兵員の休養長体力増強に努め次期作戦の準備をした
患者の治療看護も充分出来ず状況に置かれて居たが長期作戦と給
養不良に基く栄養失調患者多発し收容二〇〇名に及ぶ其の半数は

死してゐる

前半患者は患者輸送隊又は工兵隊舟艇により涿水を攸果を全て
衛山方面へ後半安仁来陽を全て衛陽方面へ後送された

(2) 攸果地区 (七名) 4FL (20/19/30) 開設

収容患者平均約三〇〇名 (外科二〇〇) として營養失調による死亡者其
の半数に及んだ 後送可能の者は患者輸送第三十三班により衛山方面

へ馬送担送し 轉入患者は主として茶陵より野病から馬送された

(3) 安仁地区 (二名) 2FL (20/11/8) 茶陵患者集合所、攸果緑田(野病)

来陽野病院開設 来陽野病に於ては内外科平均三十四の名を収
容し死亡其の半数に及んだ (其の大部分は栄養失調症)

安仁野病の患者は主として衛山方面へ来陽の患者は衛陽方面へ後送
された 来陽地区病院群の状況に就ては第三十四師団資料通報

特に来陽野戦豫備病院第三十三班の状況を参照された

(4) 蓮花地区

3L 岩田竹根 (20/17 2FL 入院) に関しては新資料を得られなかった

茶陵―攸果―安仁―衛山間敵情悪く輸送途次屢々敵襲を受け

又空爆により受傷者発生不明者を出した事がある

兵団が20/10遂に贛地区進攻作戦を開始するに及び入院患者を残置するに決し茶陵凡は野戦豫備病院才三班、攸縣組は才三、安堵病院患者療養所へ安仁凡は耒陽野戦豫備病院第三十三班へ夫、申送った

部隊出勤後の退院患者は主として攸縣第二十七師團警備隊（長八、鈴木中尉）に收容、附近警備に任じた等

本地区に於ける突明対象個々に就いては新資料を得られなかったが、衡山地区病院に転送入院の記載がないので、其次南の三継病院に於て加療中死亡したものと判断される。而も該地区に於ける病院の入院患者名簿は不備又は全然ないもので、是等患者の状況は全く不明である

(ハ) 贛州地区（一名）

南康凡、20/19入院したBA小池正明に就いては、部隊轉進の際岩本支隊野殺に申送り、附添として、市川勢を派遣したから、同々に就き、調査

すれば仔細判明する苦である

41 本籍地 西加賀郡石井村 宇奈月半地
現在所 東京市神田区 西船場一三五

中衛 任長 市川勢

(九) 一般参考資料

(1) 兵団は高波湖程安仁邊嶺三南江四作戦と直隶の連続であった關係
上是に追及する病院も亦一地に長期滞在する暇なく二三日で閉鎖
前進を続けるのが例である

是が内患者が病院位置へ行つて見ると既に閉鎖後で病院を索め
て歩いてゐる中に生死不明となつたもの 即ち所屬部隊は入院として
取扱つて居る者中實際は病院へ到着してゐないものが相当数ある
模様である 移動が激しいので關係書類の整備も完全に出未
なかつた
(11 隅田 爲三提供)

(2) 後亦兵站統がす糧秣程度に缺乏し患者食も充分なから小なりので
独歩患者は稍刈りをしなかり自分の糧食を作りかばちや唐
からしを以て僅かに飯を凌ぐ有様で爲に栄養失調患者が急増
した 剽、周辺の敵情悪く糧秣徴發に出た終、生死不明となつた
ものが相当数に昇つた

(3) 敵航空機の跳梁活発にして第一線部隊は勿論患者輸送隊部隊
追及者等ではより損害は相当地なる様様である。晝間疲散
に伏し夜間行動するものが例であった。

(4) 歩軍曹 梅澤光雄 は1943左足挫傷による河南省新郷陸病入院
1957北京一五三兵站病院へ転送 1963治療退院
本人留守宅通信によれば部隊追及中岳州残留部隊に編入八月末衡
陽に向け前進中生死不明となる。

前記北京地区退院者ハニ見式重と同行者と思料されるが華北地
区退院者は一般に京漢線により南下してあるが途中事故の原
因となすべしものはないから華中地区進出後の事故者と判断す
べし。

(5) 来陽野戦隊備高院カ三三班 (1944)

当院の收容記録患者の大部分は勿論関係者で当時安仁茶陵地区
には未だ同兵团野戦病院の一部は存置されておた。1944年頃の
收容一〇〇〇一三〇〇三及び以後送還意の地となする上北死者多。

し混乱した時期がある。二回程軽便鉄道によりまゝとして自動車に
より専ら夜間銜湯方面へ後送された。

死亡の大部分は、多くは急性水痢及戦傷による養失調患者である。

四 結 論

資料保持者は五年前の記憶を辿って提供する関係上日時や
地域に若干のずれはあつたかも知れないが出願者は何れも戦友を
思ふ一念から極めて熱心に協力し当時の状況中の人となり、
貴重な資料を提供され殆んど行つまつて居た入院患者の死
明に新生面を切り開いて下した。

今次会同に於て概ね患者の勤行が判明し認定に関する基礎的
資料を把握する事が出来たので新たに提供された好資料保持者は
対する照会等一段と振り下げた究明を続け成果の拡充に努める
本会同の成果に鑑み好資料保持者の選定法及準備資料の整
備等に関し尚改善を要する点があると思ふ。他方面に就いて
実施する場合は充分研究を要する。最後に世話課提供の寫眞
は調査上非常に役立つ事を附言する。